特集2 アフリカ女子割礼

「女子割礼」をめぐる研究動向

――英語文献と日本語文献を中心に

富永智津子 TOMINAGA Chizuko

一 はじめに――「女子割礼」廃絶運動の歩みとの関連から

まず、「女子割礼」について、簡単にみておこう。以下は『文化人類学事典』（弘文堂、一九八七）の「割礼」の項目からの抜粋である。

〔割礼とは〕狭義には、男性の陰茎包皮を環状に切断する手術をさし、英語の circumcision の原義もこれである。ただし、今日では、男女を問わず性器の一部を切除したり、切開したりする手術一般を意味するものとして使われている。〔……〕女子の場合には、陰核の一部もしくは全体を切除する形態が多いが、小陰唇や大陰唇の一部や全体を切除するもの、さらに陰唇切除後にその部分を縫合するものまである。エル＝ダリール（A. El-Dareer）によれば、現在のスーダンにみられる女子割礼には三つの類型がある。陰核を切除するだけのスンナ型、陰核・小陰唇・大陰唇の切除後に患部を縫合するファラオ型、さらに後者が一九四六年に法的に禁じられた後に登場した両者の中間型である（一五一頁、文責 大塚和夫）。

エル＝ダリールの三類型は、それぞれ「クリトリス切除」（clitoridectomy）、「縫合」（infibulation）、「切

除」(excision) とも呼ばれている。他にも五つの類型に分類する方法 (Dorkenoo 1994: 5-8) やWHOによる四類型方式などがあるが、この解説からも、男子の割礼とは異なり、女子の割礼の形態がいかに多様であるかがわかるだろう。しかも、切除される器官が持つはずの機能は、男子が切除される包皮の機能とはまったく異なることも明白である。[1] それが、女性の身体や精神、あるいは生活や出産に悪影響をおよぼしているのではないかとの疑念は、現地で「女子割礼」に遭遇した宣教師や医者によって、早くから提起されてきた。例えば、一七世紀のエチオピアでは、ローマ・カトリック教会の宣教師が「健康に有害でないはずがない」と考え、禁止に向けて行動を起こしている (*Ibid.*: 38)。二〇世紀の事例で、研究者が注目するのは、一九二〇年代のケニアの「女子割礼論争」である。これは、スコットランド教会やイギリス国教会の宣教師が「女子割礼」を禁止、あるいは制限しようとして現地の人々の抵抗を引き起こし、論争に至った事例である (Leakey 1931; Rosberg 1970; Neckerbrouck 1978; Munene 1986; Presley 1992)。一方、スーダンで宗主国イギリスが一九四六年に縫合タイプの「女子割礼」を法的に禁止したり (Rahman *et al.* 2000: 216)、一九五〇年代のエジプトのコプト・キリスト教のように、エジプト人によるきわめて真摯な廃絶にむけての調査や提言が行われていた事例もある (Meinardus 1970: 318-341)。方法は様々だったが、共通していたのは、こうした試みが、あまり効を奏さなかったことである。それどころか、一九五〇年代のケニアのように、「女子割礼」がナショナリズムの砦として強化された地域もあった (Thomas 1997)。

一方、国際社会では、一九五二年以降、WHOを窓口として「女子割礼」の問題に取り組もうとする国連の動きがあったが、それが、現実に動き出すには、女性の地位向上に向けての世界的な運動の展開まで待たねばならなかった。[2] そのきっかけとなったのが「国連女性の一〇年」(一九七五―八五年) である。例えば、フラン・ホスケンは「国際女性ネットワーク」(WIN、一九七五年設立) を通じて反「女子割礼」(FGM) キャンペーンを開始し、アフリカにおいてもNGOが活発な取り組みを開始している。[3] 研究動向との関連では、その中間年にあたる一九八〇年にコペンハーゲンで開催された世界女性会議が、その後の「女子割礼」論争の流れを決定づける画期となったという意味で重要である。その舞台となったのは、一二〇か国八千人が参加したNGOフォーラムであった。「女子割礼」問題が、この非公式のフォーラムで、きわめてセンセーショナルに取り上げられ、アフリカ諸国の参加者の反発を買ったのである。

イギリス在住のアフリカ人研究活動家ドルケヌーは、その時の状況を次のように報告している。「反発は、FGMの方法や後遺症にばかり注目し、それが行われている状況や理由を考えようとしないメディアの取り上げ方や、数年前なら、こうした問題が公に言及されることは不可能だっただろう、といった欧米の参加者による一方的な決めつけに向けられた。切除や縫合を伴うFGMが広く行われているスーダンやケニアやソマリアでは、それに反対するキャンペーンがすでに活発に行われていたからである。一方、西アフリカ諸国からの参加者は、西欧の人々がFGMにむける関心の強さにショックを受けた。彼女たちは、FGM廃絶は彼女たちにとって優先課題ではない、十分な食糧やきれいな水の方がずっと重要なのだ、欧米の関心の強さは植民地的・新植民地的な外部の干渉である、と主張したのである。また、ブルキナ・ファソの代表は、アフリカに一度も行ったことがないフランス人女性の司会の下で、問題が議論されたことに大きなショックを受けたと発言した」(Dorkenoo 1994: 63)。

ドルケヌーは、最後にアフリカ人女性と欧米の女性との間のこの対立を次のように総括している。「フォーラムの議論は、おそらくこの野蛮な慣習の即時廃絶を考えねばならぬという強い見解をもつ何人かの欧米の参加者に再考を促した。つまり彼女たちは、この慣習と闘っているアフリカの女性たちを支援する唯一の効果的な方法は、当該諸国の人々によって、あるいは彼らと一緒に計画され、実施される特別なプロジェクトや教育活動を支援することであると確信するようになったのである」(*Ibid.*: 63)。

実は、こうしたコペンハーゲン会議のNGOフォーラムでの対立の構図は、この会議以前に西欧の廃絶運動家とアフリカ人との間で展開されていた。アフリカ側からの批判の急先鋒は、この会議に先立って出されたアフリカ人によるアフリカ人女性のための組織であるAAWORD(註3参照)の意見書(AAWORD 1983)であった。そこでは、フラン・ホスケンら欧米の女性たちが行ってきた「女子割礼」廃絶運動が、いかに「ユダヤ・キリスト教的な西欧社会の道徳的、文化的偏見から生み出された」ものであるか、また、その担い手たちがいかに「自文化中心的な偏見の根深い国々で、このようなキャンペーンが喚起する潜在的なレイシズムに無自覚」であるかを指摘し、「性器切除と、女性を抑圧し、経済的、社会的に女性を搾取することを正当化する――伝統的であれ、近代的であれ――他のあらゆる習慣は、女性の基本的権利に対する重大な侵害であり、厳しく非難されねばならない」とのAAWORDの立場が表明されている

（岡 1998：248-249 参照）。

このＡＡＷＯＲＤの立場は、医者であり、文学者であり、活動家であるエジプトのナワール・エル＝サーダーウィの次のような発言とも重なる。「彼女たち〔欧米のフェミニスト〕が団結と考えているこの種の援助は、もう一つの植民地主義を偽装したものである。したがって女性性器切除（ＦＧＭ）の問題はわれわれが扱う問題である。ＦＧＭはわれわれの文化であり、われわれはいつ、どのようにして闘うべきかを知っている。なぜなら、これは解放のプロセスなのだから」（El-Saadawi 1980a, cited in: Gruenbaum 2001：204）。

以上のようなアフリカ側からの批判は、スーダン人医師ナヒード・トゥビアによる論考（Toubia 1985）では、さらに進んで、使用される用語それ自体にまで向けられている。トゥビアは、「風習」、「儀式」、「伝統」、「社会的タブー」といった用語には、「痕跡をたどることもできないような過去から受け継がれてきた、合理的な意味など何もない何か、伝統的な人々の、〈我々には〉手を触れることのできない感性の領域の中にある何かである、というようなメッセージ」が含まれているとする（岡 1998：249 参照）。

こうしたコペンハーゲン会議とその後の西欧の「女子割礼」廃絶運動への批判が、研究者の間に困惑を引き起こしていたさなか、「女子割礼」を女性への拷問や暴力として捉え、ドキュメンタリー映像『戦士の刻印』を制作して「女子割礼」（ＦＧＭ）廃絶キャンペーンに乗りだしたのがアフリカ系アメリカ人の作家アリス・ウォーカーであった（Walker 1982, 1993）。小説『カラーパープル』でピューリッツァー賞を受賞した彼女の影響力は絶大で、『戦士の刻印』は、国際社会にさまざまな波紋を投げかけることになった。アメリカでは賛否両論あったが、研究者の間では、その単純な構成やステレオタイプ的なアフリカ人女性の描き方に対する非難が噴出した（Walley 2002：33；Robertson 2002：64）。一方、日本では、この映像をきっかけに廃絶運動が展開することとなった。運動を開始したのは、一九九六年一月に設立された「女性の性器切除と人権侵害に反対し行動する女たちの会」（Women's Action Against FGM, Japan. 一九九九年に「ＦＧＭ廃絶を支援する女たちの会」に改称）である。この会は、各地で『戦士の刻印』の上映会を開催し、メディアにも「女子割礼」に関する情報を発信した。こうした日本の廃絶運動やメディアの報道のあり方に対し、ウォーカー批判の視点から警世的な論陣を張ったのが、現代アラブ文学／第三世界フェミニズム思想を研究テーマとする岡真理である（岡 1995, 1996, 1998, 2000）。岡のウォーカー論に対しては、最近千田による批判が展開さ

れており（千田 2002）、これについては、三節で詳しく紹介する。

さて、コペンハーゲン会議や会議を画期とした以上のような動きは、国際社会に二つの大きな流れを形成した。一つは、国連諸機関[4]やアフリカ人の女性エリート（多くが国連機関に勤務する夫を持つ）が結成したNGOによる「女性割礼」廃絶への取り組みの開始であり[5]、もう一つは、「普遍的人権論」（あるいは、「人道至上主義」）と「文化相対主義」、ならびに「第一世界フェミニズム」（あるいは「自文化中心主義」、「文化帝国主義」）と「第三世界フェミニズム」といった議論の分極化をいかに乗り越えるか、という課題を研究者に投げかけたことである。換言すれば、それは、女性の人権擁護の立場と文化人類学の提起する文化相対主義とをどのように論理的に整合化できるか、「第一世界」に住む者が自己の主観性を超えていかに「第三世界」に住む人や文化について語ることが可能か、というきわめて原理的な地平の確認という課題である。新たな「女子割礼」に関する研究や論争は、この地平から生まれてくることになる。

以下、コペンハーゲン会議前の時期も視野に入れながら、「女子割礼」の研究史を四期に分けて概観し、最後に「女子割礼」言説をめぐる論議を紹介したい。文献の検索にあたっては、主に、次の著書の巻末リストを参照した（Boyle 2002; James *et al.* 2002; Shell-Duncan *et al.* 2000）。この三冊は、様々な領域の研究をカヴァーしており、研究の大きな流れは把握できると考えている。なお、欧米系の研究者に関しては、国籍を明記せず、それ以外の出身（アフリカやアジア）に関しては、できるだけ記すようにした。

二　「女子割礼」研究史の概観

第一期（一九〇〇頃―一九七四年）

この時期の主要な文献として、二〇点ほどを挙げることができる。地域的にはケニア、スーダン、エジプトに集中している。テーマ別に見ると、いずれも、「女子割礼」の実態を明らかにしようとした研究が多いが、同時に出産や不妊との関連を含めた医学的なアプローチも現れている。歴史研究が登場したのもこの時期である。この二〇点の他、性科学の発展に対応して、ベルリンの「性科学研究所」による「未開社会」の性的慣行に関する大規模な調査が行われた。

研究対象として「女子割礼」を最初に取り上げたのは、文化人類学者である（James *et al.* 2002: 56）[6]。そのアプローチは機能主義的文化相対主義であり、マリノフスキ

ーの指導の下で、キクユ民族の生活を描いたケニア初代大統領ジョモ・ケニヤッタ（Kenyatta 1938）やケニア生まれのイギリス人リーキーの著作（Leakey 1931）、あるいは同じくケニアのカレンジンの事例を扱ったウェルボーンの論文（Welbourn 1968）は、その代表例といえよう。このうち、ケニヤッタとリーキーの文献を比較検討した荻原弘子は、ケニヤッタには男性の視点が色濃く反映されており、リーキーの研究にはケニアの白人宣教師の性急な「女子割礼」禁止を諫め、キクユの伝統を重んじることによって植民地支配者がキクユ人と無駄な対立をしないようにとの支配者側の立場が見え隠れしているとの指摘を行っている（荻原 2000：86）。

エジプトでは、コプト・キリスト教徒の事例を含め、「女子割礼」の起源・その宗教との関連・類型・施術方法・施術の理由・性感との関連・廃絶への提言などを含む民族学的、社会学的、医学的な諸側面からの研究調査が相次ぎ、一九六〇年代には、「女子割礼」関連の著書目録まで編まれている（Meinardus 1970：318-341）。一方、スーダンに関しては、一九三〇年代にイギリス植民地下で縫合タイプの事例が報告され始めると同時に、医学的調査研究への取り組みが開始された。

ベルリンの「性科学研究所」による「未開」社会の性に関する調査研究の一部は、一九六〇年に邦訳出版されている（ベルリン性科学研究所 1960）。邦訳は、同研究所の人種学部長ライツェンシュタイン博士の大著『自然民族のあいだにおける女』の第三章と、研究所発行の雑誌編集者フェーリンガー博士著『自然民族の性生活』の訳出であり、「女子割礼」に関し、「性器を傷つける習慣と性的刺激の強化」と題する一節が設けられている。ちなみに、本書では、アフリカの事例だけでなく、西アジアやパキスタンやインド北西部のイスラム教徒の「女子割礼」の事例も紹介されている。

この時期の注目すべき研究領域は、初めて「女子割礼」を歴史的文脈の中で議論しようとする試みが行われたことであろう。ケニアのキクユ地域で起きた「女子割礼論争」の考察である。ロスバーグとノッティンガムの研究（Rosberg *et al.* 1970）はマウマウ闘争史の中でこの論争を位置づけ、ネッカーブルックの研究（Neckerbrouck 1978）は、「女子割礼」キャンペーンから独立教会がどのようにして生まれたかを、「アフリカ独立ペンテコスタル教会」（African Independent Pentecostal Church of Africa）に焦点をあてて明らかにしようとしたものである。後者については額田が詳しい論評を試みている（額田 2000）。

第二期（一九七五―八五年）

「国連女性の一〇年」にあたるこの時期には、女性研究への取り組みが世界各国で開始された。「女子割礼」に関しても、その後の研究動向に大きな影響を与える著作が数多く出版されている。主な著作を領域別に分類すると、総論八、医学・生殖関係一六、人類学・民族学六、事例研究四、人権・廃止プログラム関係七、歴史一、自伝的評論一、となっている。この時期の特徴は、「女子割礼」が女性の健康にどのような影響を与えるかを医学的に調査研究した文献が増加したことであろう。これは、国際的な廃絶への取り組みが、女性の健康という側面から行われていた状況とも対応している（註4参照）。

ここでは、文化人類学的研究を行ったローズ・オールドフィールド・ヘイズ、「女子割礼」の包括的研究を行ったフラン・ホスケン、自伝的作品を著したナワール・エル＝サーダーウィ、そして医者の立場から実態調査を行ったアスマ・エル＝ダリールと、オレインカ・コソ＝トーマスを中心に紹介する。

ヘイズの研究（Hays 1975）は、スーダン北部の事例研究を通して、なぜ女性が縫合タイプの「女子割礼」を擁護するかを、父系社会の親族組織における女性の地位から考察している。そこでは、家族の尊厳を守るためには、女性メンバーの純潔が肝要であり、その試金石となるのが「女子割礼」であるとの社会構造に軸足を置いたきわめてオーソドックスな考察が展開されている。同時に彼女は、「女子割礼」を収入源とする施術者の存在と、未婚者の妊娠防止や出産時の死亡率からその人口抑制効果にも注目する。ヘイズの論文を取り上げた小川了は、彼女の人口抑制効果説を、アフリカ諸国の人口の増加を問題視する先進国の自民族中心主義的見方として批判する（小川 1999：136）。

なお、この時期、日本人研究者による二編の論文が報告されている。ケニアのグシィ社会における「女子割礼」のモノグラフを試みた松園典子（松園 1982）と、タンザニアのイラク社会とゴロワ社会の事例を比較調査した和田正平（Wada 1984）の業績である。一九八〇年のコペンハーゲンでの世界女性会議におけるホスケンに対する批判の紹介からはじまる松園の論文は、おそらく、日本人による参与観察に基く初の人類学的手法による「女子割礼」報告であろう。

一方、ローカルなレベルにとどまっていた「女子割礼」に関する知見を、一挙に英語圏の人々の間に広めたのが、人権の視点から廃絶運動に積極的に取り組むようになるフラン・ホスケンである。彼女の『ホスケン・レポート』は（Hosken 1979）、文献調査と医者や産婆からの聞き取りによって、「女子割礼」の実態を包括的に

纏めた初の研究であり、国別データの収集を初めて試みたことでも知られている。内容的には、事実関係の間違いや、アフリカ研究の専門的訓練の欠如などが指摘されているが、一九九三年には第五版が出版され、今日なお引用されることの多い基礎文献の地位を維持している（James *et al.* 2002：60-61）。日本でも、一九九三年に邦訳され、邦文で読める唯一の包括的文献となっている。しかし、コペンハーゲン会議前後から、歴史的文脈やアフリカ社会の現実を無視した尊大な自民族中心的論調であるとして、厳しい批判が寄せられていることはすでに言及したとおりである。

外国人による調査研究が相次ぐ中、この時期、アフリカ人女性の著作が英語で出版され注目を浴びた。その一つが、一九八〇年に出版され、邦訳もされたエジプト人ナワール・エル＝サーダーウィの『イヴの隠れた顔』（El-Saadawi 1980b；邦訳 1988）である。彼女自身が精神科医でもあるエル＝サーダーウィは、幼い時に自分が経験した「女子割礼」のトラウマにも言及しながら、国際社会の経済格差（構造的搾取）やエジプト社会の階級構造や家父長的構造の中に「女子割礼」を位置づけている。同じ廃絶論とはいえ、「女子割礼」のみに焦点をあてているホスケンの分析視点とはスタンスの上で異なっている。[7] また、一九七〇年代から「女子割礼」の廃止に取り組んでいたセネガルのフェミニスト活動家アワ・ティアムの著作（Thiam 1986）や、エジプトの作家であり画家であり、かつジャーナリストでもあるナヤラ・アティヤによるカイロの下町女性五人からのライフ・ヒストリーの聞き書き（Nayra 1984）も出版された。さらに、医者としての立場から、ハルツーム大学の医学部をベースにプロジェクトを立ち上げ、大規模な調査を北部スーダンで行ったスーダン人のアスマ・エル＝ダリールの著作（El-Dareer 1982）は、三二一〇人の女性からの聞き取り調査に基づいて、「女子割礼」が女性の健康やセクシュアリティにどのような影響を及ぼすかを考察し、この領域における研究に道を拓いた。一方、ナイジェリア人医師コソ＝トーマスは、シエラレオネの事例分析を通して成人儀礼の一環としての「女子割礼」を紹介した後、廃絶に向けての二〇年計画のための詳細な提案を行った（Koso-Thomas 1985）。シエラレオネという一地域を対象とした提言であるが、彼女の廃絶計画は他の地域にも適用できるモデルとして評価されている（James *et al.* 2002：91）。

なお、この時期、初めて一九世紀アメリカにおける性器手術（女性のヒステリーや女性特有の病気治療を目的としたクリトリス切除）に関する論文（Barker-Benfield 1975）が発表されたことは、その後のアメリカにおける

自文化相対化の第一歩を印したものとして注目される。

第三期（一九八六―九五年）

この一〇年間の主な文献をテーマ別に分類すると、総論三、文化人類学や医療人類学を含む事例研究二一、法律関連の研究六、人権・フェミニズム論二一、不妊・出産を含む医学関連一五、歴史五（ソマリア一、ケニア四）、その他、宗教やジェンダー・アイデンティティをめぐる業績が一点ずつとなっている。これらを第二期の文献群と比較すると、人権関連の論文の増加と法制関係の研究の台頭が特徴的である。この変化は、これまでの健康を理由とした廃止運動が人権を軸に展開し始め（普遍的人権主義への批判論文も含む）、具体的な廃止にむけての戦略が提示されると同時に、「女子割礼」廃止をめざす法制化がアメリカやオーストラリアで議論され始めるという時代の流れを反映している。また、多くの事例研究が報告されたことも見逃せない。そこには、従来のスーダン、ソマリア、エジプトに加えて、イギリス、ナイジェリア、ソマリア、タンザニア、ガンビア、ブルキナ・ファソ、ガーナが登場した。

まず、文化人類学の分野で注目を引くのは、ジャニス・ボッディ（Boddy 1989）の事例研究である。ボッディは、スーダン北部で行われている縫合タイプの「女子割礼」についてまず歴史的考察を行い、次いで、インテンシヴな調査に基づいて、女性たちが「女子割礼」（FC）を行っている意味世界を象徴人類学的手法で読み解いた。ボッディは、女性の陰部縫合・浄化・清潔さと、ダチョウの卵・囲い・子宮とを象徴的に結びつけることによって、女性たちは、自分が、夫の性交渉の相手でも召使でもなく、母親としての自立性と社会性を主張しているのだ、と解釈する。つまり、「女子割礼」は、セクシュアリティの重要性を減退させることによって、女性の出産性を強調するというきわめて意味のある行為だとスーダンの女性たちは考えているというのである。

本書について詳細な紹介を行った岡真理は、二つの点でボッディを高く評価する。一つは、ボッディが女性たちを「単に家父長制の犠牲者とかその無批判な受容者と見るのではなく、従来の人類学とフェミニズムの議論の双方で沈黙させられてきたこれら女性たちの行為主体としての能動性を指し示そうとした」点、もう一つは、「女性のエスノグラファーは、彼女の生物学的性のおかげで、異なる社会の女性たちに、より密接に近づくことができる。〔……〕だが、同じジェンダーを共有してはいないのだ」というボッディの言葉を引きながら、「同じ女ではない、という人類学者としての苦い自覚が逆説的にも、エスノセントリズムを免れ、植民地主義的な関

係性を解体するようなフェミニズムの実践を可能にしている」点である（岡 2000b：110）。一方、大塚和夫は、「彼女の議論はスーダンにおける権力関係をあまりよく見ていないため、調査は、社会の奥まで踏み込むことなく、表面的なものにとどまっている」というエジプト人人類学者兼活動家のセハーム・アブドッサラームによるボッディ批判を紹介している（大塚 1999：111）。

日本人の研究としては、タンザニアのイラク社会における「男子割礼」と「女子割礼」の変化を追った和田正平の論文（Wada 1992）がある。一九八四年の論文の続編として位置づけられる。和田は、一九七〇年代のウジャマー政策による村落形態の変化による「男子割礼」の個別化と医療化を論じた後、禁止されながらも密かに継続されている「女子割礼」の未来に関して次のように結論づける。「男子割礼が慣習として継続されているとしたら、女性がクリトリス切除を拒否する理由はどこにあるのだろうか？　その意味で、男子割礼は、人類学的観点から両性の違いを考えるための重要なイッシュー」なのである。

さて、第二期の「女子割礼」とセクシュアリティとの関係をめぐるエル＝ダリールの研究を継承する業績としては、ハニー・ライトフット＝クラインを挙げることができる（Lightfoot-Klein 1989）。彼女は、一九七九―八三年にスーダンの首都ハルツームの病院で行ったインタヴューのデータに基づいて、多くの女性が性生活を含む結婚生活に適応していることを明らかにした。しかし、調査対象には大学生や病院勤務のエリート女性が多く、調査結果が一般化できないことを、彼女自身も認めている。

次に、包括的な社会学的実態研究の領域では、エスター・K・ヒックスとエファ・ドルケヌーの二つの業績が注目される。

ヒックスの著書（Hicks 1993）は、縫合タイプの「女子割礼」を対象とした最も包括的で詳細な研究書である。彼女は北東アフリカ、アラビア半島、東アフリカの四六の社会集団を取り上げ、統計学的手法により、縫合タイプの「女子割礼」がどのような特性を持つ社会に見られるかを明らかにした。一方、アフリカの子供と女性の健康の推進を目的とするロンドンベースのＮＧＯ組織「フォーワード・インターナショナル」（Foundation for Women's Health Research and Development）のディレクターであるガーナ出身のドルケヌーは、ＷＨＯとも協力して、「女子割礼」の問題に関する国際理解の促進に努めてきたアフリカ系のアクティヴィストである。一九九四年に出版された著書（Dorkenoo 1994；改訂版 1996）は、「慣習とその防止」（The Practice and its Preven-

tion）という副題が示すように、「女子割礼」の地理的分布、形態、実態、身体への影響、普及度、起源、理由、問題の諸相（女性の社会的地位、家族、経済的地位、結婚、権力との関係、機能的側面、女性や子供の権利、健康の権利、開発の権利）、国際的な取り組み、各国別の取り組み、将来への展望について簡潔にまとめている。

歴史の領域では、ロスバーグとノッティンガムの事例研究を受け継ぐものとして、土井茂則のケニアにおける「女子割礼」をめぐるキクユ人とキリスト教ミッションとの対立についての論文が『アフリカ研究』（日本アフリカ学会誌）に発表された（土井 1986）。論文の焦点は、割礼論争とマウマウ闘争を引き起こしたキクユのナショナリスト運動との関連を検証しようとしたものであり、日本における「女子割礼」をめぐる初めての歴史研究である。これと同じテーマは、コーラ・アン・プレスリーによるキアンブ県におけるマウマウ闘争の女性史の中で、独立教会や独立学校との関連で言及されている（Presley 1992）。

この時期の自伝的手法を用いた作品として、ジャニス・ボッディらによるソマリアの少女アマンからの聞き書きがある（Aman 1994）。縫合タイプの「女子割礼」を受けた少女が、自分の体験を生活誌の中で語るその語りをもとに、ソマリ社会における「女子割礼」の意味や受容のされ方が明らかにされている。

日本においては、この時期、「割礼」を儀礼的暴力という視点から文化人類学的に考察した田中雅一の論考が登場した（田中 1994）。「割礼」は文化か暴力かという議論が欧米でも日本でもなされてきたが、田中はその両方の要素を含むものとして「割礼」をとらえ、考察の対象にしており、二者択一論を乗り越える視座を提供している。なお、このアプローチは、『暴力の文化人類学』において、インドのサティーを事例に展開されている（田中 1998）が、この田中の議論に対しては、「この種の議論の陥穽は、社会や文化の「変化」もしくはその可能性を無視しがちなことである」との大塚和夫のコメントがある（大塚 1998：286）。

第四期（一九九六―二〇〇三年）

北京世界女性会議後のこの時期に出版された文献は、総論二、啓蒙的一般論五、人類学九、事例研究六、法律関係一三、健康・人口・出産関連七、人権・廃止論六、教育分野一、歴史学五、社会学一、医療化三、宗教学一、自伝一、などとなっている。第三期の文献群と比較すると、この時期の特徴は、人権関連の文献が減少した一方、法律関係の論文が増加したことであろう。これは、「女子割礼」が女性の人権問題であるとの認識が定着し、各

国で禁止にむけての法制化が進展している状況を反映している。

まず、九〇年代後半の研究成果を集大成したシェル＝ダンカンとイルヴァ・ハーンランドが編集した論文集の紹介から始めよう（Shell-Duncan *et al.* 2000）。本書には、研究史の簡単なサーヴェイと「女子割礼」の実態の説明に続いて、人口学・社会学・医学・歴史学・人類学といったさまざまな専門領域の論文の他、フェミニスト言説の再考や具体的な廃止への取り組みなどを含む一四本の論考が収録されている。それらは、「女子割礼」の起源・健康障害・セクシュアリティ・意味のほか、出産率や宗教との関連を論じながら、「女子割礼」の文化的・社会的・経済的・政治的・歴史的側面や医療化の問題を論じている。いずれも、これまでの研究成果を再検討する中で、従来とは異なるデータの追加や考察を行い、一筋縄では行かない「女子割礼」の多様性と問題点を明らかにした。

例えば、縫合タイプの「女子割礼」を行っている女性の不妊率や流産率や障害児出産率が高いこと、シエラレオネの「女子割礼」は家父長制とはまったく関係なくむしろ女性のエンパワーを目的としていること、代替儀礼の導入によって「女子割礼」の廃止に向かう社会もあれば新たに「女子割礼」を取り入れる集団もあること、縫合タイプの手術であっても実際にはクリトリス切除をされていない事例が復元手術の中で明らかになってきたこと、などである。

こうした考察を通して、本書は、「普遍的人権概念」＝「西欧の価値観」がいかに「女子割礼」を行っている社会の価値観と異なるかを提示した。例えば、子どもの幸せを願って施術している親にとって「女子割礼」は決して「幼児虐待」には当たらないこと、「女子割礼」がリスクを負うに価すると考えられている社会では健康上の問題は廃止の理由にはなりにくいこと、などである。この点に関しては、麻酔や清潔な器具を使用して病院で行われる近年の「医療化」が、一つの論点になっている。例えば、それが廃止の障害になると考えるＷＨＯなどの団体は医療化を禁止しているが、女性の健康の保全を第一に考えるのであれば、医療化という移行措置があってもよいと考える医者や研究者もいる（Mandara 2000）。

このように内容は多岐にわたっているが、本書を貫く視点は一貫している。つまり、「女子割礼」を行っている人々を非難することも、その継続を支持することもなく、執筆者がそれぞれの文脈の中で分析を行うという視点である。それによって、人権派対文化相対主義、第一世界対第三世界という分極化した議論の整合化と調整を目的としたのが本書である。それは本書が、ナイジェリ

ア人やケニア人、あるいはシエラレオネ系アメリカ人など多様なエスニシティの執筆陣によって構成されていることと関係していると思われる。しかし、このスタンスに対して、「女子割礼」の様々な文脈を理解する真剣な努力を欧米の批評家や活動家に促すという点では評価できるが、「変革への展望に関して、冷静かつ楽観的すぎる」との印象を与えかねないとの批判も出ている(Gruenbaum 2001: 23)。

次に注目されるのは、文化人類学の領域のモノグラフである。いくつかの成果を読み比べてみると、大きくわけて二つの潮流が見て取れる。一つは、スーダンでのフィールドワークを含むエレン・グルーエンバウムの著書(*Ibid.*)に見られる「人権派文化相対主義」とでも言える流れである。その軸足は「慣習への理解を促し、単純な非難を避け、変革を支持する人々にその確たる根拠を提供する」(*Ibid.*: 1)ことに置かれている。

もう一つは、「女子割礼」を行っている女性の「主体性」を掘り起こしたり、彼女たちの語りを重視する流れである。「女子割礼」を是としないものの、前者に比べて、慣習の変化や変革への視点は弱い。ホマ・フードファル(Hoodfar 1997)や縄田浩志(縄田 2003)の業績は、この流れに分類することができるだろう。フードファルの著書については大塚の紹介がある。それによれば、彼女は、イギリスで人類学を学び、カイロの下町で聞き取り調査を行ったイラン出身の女性である。イギリスで聞きなれた「女子割礼」に関する言説とカイロの下町女性の言説とが、あまりに異なることを発見したフードファルは、「女子割礼」を女性が主体的に関わる「女性らしさの世界への通過儀礼」と位置づけた(大塚 1998: 281-285)。一方、縄田の関心は、「主体的な意思とは無関係に自身の性器が施術され、身体的にその性器との共存を強いられた女性が、その後の人生において自身の性器と向き合って生きていく現実」(縄田 2003: 169)にある。スーダン女性への聞き取りを通して、彼は、それを「香の文化」との関連で考察した。なお、第二期のエル=ダリールや第三期のライトフット=クラインが医学、あるいはセックス・リサーチャーという立場からセクシュアリティそのものを調査の対象としたのに対し、縄田は、人類学の手法で、女性の文化とセクシュアリティの関連を探っている。

日本人による医療や健康関連の研究としては、若杉なおみの国際保健学の研究(若杉 1999a, 1999b)と田中清文の医療人類学の業績(Tanaka 2000)がある。若杉は医療従事者の視点から「女子割礼」の母子保健に与える影響を、田中はケニア西部の健康開発に関する調査の一環として、「女子割礼」の実態・意味・健康への影響な

どを社会構造や文化的価値に目配りをしながら考察している。なお、未発表ではあるが、「女子割礼」（FGM）問題に介入する上での教育活動の役割をテーマに、ロンドン大学で修士論文を執筆した細川さわの研究もある（Hosokawa 2001）。

社会学の領域では、エリザベス・ヘガー・ボイルによる研究（Boyle 2002）を挙げておこう。これは、「グローバル・コミュニティにおける文化対立」という副題が示すように、国際社会・国家・個人、という三つのレベル間で、「女子割礼」をめぐってどのような対立・協調・妥協・介入が進展し、それらがどの方向に収斂しようとしているかを分析している。例えば、国際社会の「普遍的価値」（例えば健康権・虐待を受けない権利）と国家的利害（例えば予算配分・開発優先）との対立が、国際社会による国家の政策への介入（例えば国際条約や援助政策）を通して、どのように調整され、それが、さらに国家と個人との間にどのような対立を生み出すか、といったアプローチである。具体的には、この三つのレベルの廃絶運動を具体的に分析し、「女子割礼」の変化を展望する。つまり、究極的には合理主義と個人主義が国家や家族に変容をせまり、「人権」の拡大によって、「女子割礼」は廃絶へと向かうだろうと予測している。

この時期、歴史学の領域で五点の論文が発表されたことは特筆に価する。内訳は、中東一、スーダン一、ケニア三である。ここでは、リン・トーマスによるイギリス植民地ケニアのメル県において展開された「女子割礼」の政治的文脈に関する二本の論文を取り上げる（Thomas 1997, 1998）。両論文は、それぞれ一九二〇―三〇年代と一九五〇年代に行われた植民地政府や地方行政による「女子割礼」への介入に関する歴史分析である。前者は、労働力需要に応えるため、人口増加を望む政府が、割礼前の女性の中絶防止を目的として「女子割礼」を受ける年齢を引き下げようとした事例、後者は、一九五〇年代の「女子割礼」禁止に抵抗して自分たちで割礼を始めた少女たちの事例を考察している。同時期におきたキクユの「女子割礼論争」とも絡むこの二本の論文は、ケニアにおける「女子割礼」と政治との関係をめぐる歴史研究に大きく貢献した。

自伝としては、ファウジーヤ・カシンジャの『かれらはあなたの叫びを聞いてくれますか？』（邦訳『ファウジーヤの叫び』）がアメリカ合衆国で出版され反響を呼んだ（Kassinja 1997；邦訳 1999）。トーゴ出身のカシンジャは、アメリカ合衆国が「女子割礼」を理由に難民認定した第一号である。彼女の事件は、一九九六年に連邦法務局が「反FGS法」（Anti-Female Genital Surgery Law）を導入するきっかけとなった。この法律が、のち

に「インターセックス運動」と深く関わるようになってゆくのだが、これについては、次節で述べる。

このカシンジャの難民認定判決に触発された論文が四点ある。その執筆者の一人に長島美紀がいる（他三点はアメリカ人によるもの）。彼女は、この判決を事例に、難民の庇護概念の変容とその意義および方向性を公法研究の立場から論じている（長島 2003）。長島は、アメリカにおける難民の位置づけを歴史的に概観し、カシンジャ判決以前のアメリカの取り組みを紹介したのち、この判決が、人権を理由に国家が私的領域に介入し、その廃絶を要求する必要性を司法の側から明確にしたと指摘する。しかし、同判決で提示された審査基準や審査内容には必ずしも客観性が認められるとはいえず、その点では、法的信頼性に欠けると考察した。これまで、「女性割礼」を庇護政策との関連で取り上げている研究は少なく、本論文は、「女子割礼」研究に新しい領域を切り拓いたといえるだろう。

なお、最後に、ロンドンのソマリ移民社会を研究対象として取り上げた論考を紹介しておく（Cameron 1998）。ここでは、とくに縫合タイプの「女子割礼」を受けた移民女性が直面している健康上の問題と、この慣習を西欧社会で理由なく行われている出産時の「会陰切開」によって相対化しようとするソマリ人の語りが紹介されている。「女子割礼」の慣習を持つアフリカ人移民社会は、欧米で拡大し続けており、今後、この領域での研究は増えるものと予想される。

なお、二〇〇三年九月、フォトジャーナリストの内海夏子氏による『ドキュメント女子割礼』が出版された。一九九七年のシエラレオネ取材をきっかけに五回、六か国にわたる現地調査をもとにまとめられた包括的な報告書である。廃絶をめぐる現状も視野に入れられており、入門書として評価できる。

三　「女子割礼」言説をめぐる議論

ここでは、アフリカ活動家によるフラン・ホスケンやアリス・ウォーカーら欧米の活動家の「女子割礼」廃絶運動批判を機に、欧米と日本において展開されてきた「女子割礼」に関する言説をめぐる議論について、アメリカ合衆国と日本とを比較しながら概観する。

アメリカ合衆国における議論

二〇〇二年にアメリカ合衆国で出版されたスタンリー・M・ジェイムスとクレア・C・ロバートソン編集による論文集『性器切除とトランスナショナル・シスター

フッド』は、その副題「合衆国におけるポレミックスの議論」が示すように、ここ数年にわたる「女子割礼」言説をめぐるアメリカでの議論を、様々な観点から検証し、アメリカにおける問題の所在を明らかにしようとしたものである（James *et al.* 2002）。以下、本書に収録された五本の論考を紹介しつつ、論点を整理することにしたい。

編者は、冒頭で、本書が出版された経緯とその目的を、アメリカにおける「女子割礼」をめぐる議論との関連で、およそ次のように述べている。

文化相対主義から強硬な廃絶論まで様々な論調が流布する中、「全米アフリカ学会」（ＡＳＡ）[8]の女性幹部会は、一九八三年、「この問題は当事者であるアフリカ人自身が主体的に取り組むべき問題であること」を確認するとともに、「多くのアフリカ人女性や子供は食糧生産・水や燃料の確保・家族計画や現金収入といった問題を抱えており、クリトリス切除と縫合タイプの割礼が女性の地位に影響を与える唯一の問題であるという捉え方は、西欧のみに与えられた贅沢である」との見解を発表した。その一〇年後の一九九三年、アリス・ウォーカーの『戦士の刻印』が上映されると、その単純な構成を問題にした研究者らがパネル討論会を設定しウォーカーとの対話を試みようとしたが、ウォーカーは欠席。しかし、その会議で行われた国際人権問題の専門家である弁護士セーブル・ダウィットによる「アメリカ在住のアフリカ人女性と女性切除（ＦＭ）」と題する報告は、参加者に感動を与え、それが、本書を編むきっかけとなった。編者は、本書の目的を、合衆国のメディアと法的な「女子割礼」（ＦＧＣ）をめぐる論議に見られる単純かつセンセーショナルで不正確な取り上げ方を問題にすることによって、文化相対主義でも強硬な廃絶論でもない第三の道を模索し、廃絶に向けての真の協力関係を築くことにあるとする。[9]

以上の枠組みを大前提として、各論では、次のような議論が展開される。

(1)ウォリー論文では、「女子割礼」（ＦＧＯ）の慣行を変えようとするアフリカ人の努力を評価しない文化相対主義と、無批判な文化概念を用いることによって第三世界の女性との間に溝を作っている自民族中心主義の両方を乗り越え、人類学とフェミニズムの緊張関係、第一世界と第三世界の対立の構図、言説と慣行との乖離といった問題を解決するためには、固定化された文化概念を脱構築すること、つまり、「女子割礼」（ＦＧＯ）はカテゴリーとしては存在しないことを認めることによって「われわれ」と「かれら」のバリアを除去し、西欧のメディアや偏見に抗して、グローバルに展開されている言説によるローカルな慣行への介入を行うのがフェミニスト人

類学に課せられた任務であるとの議論が展開されている（Walley 2002）。

(2)ロバートソン論文は、すべての人が「女子割礼」（FGC）廃絶に協力できるようにするためには、アメリカにおけるアフリカ人差別の歴史を振りかえり、急進的なフェミニスト・新聞・テレビ・映画などのメディア・「女子割礼」をめぐる裁判・「反FGS法」制定[10]のプロセスにおける表現を検証し批判することによって、アフリカ人女性との間で率直な議論ができるような素地を作ることが必要であるとの見解を示した（Robertson 2002）。

(3)ジェイムス論文では、多様な文献やアフリカを含む廃絶への取り組みを批判的に紹介しながら、他の文化圏の伝統を、帝国主義的な尊大さを排して批判するためには、当該文化圏の中で周縁化された人々の声に耳を傾け、文化的特殊性を敏感にかぎ分けながら、国際的な人権規定の枠内に廃絶を位置づける努力をする必要があるとの見解が提示された（James 2002）。

(4)アフリカ系アメリカ人であるガニングの論文は、一九九六年にアメリカで施行された「反FGS法」の制定プロセスの検証を通して、いくつかの問題点を指摘した。一つは、アフリカ人リーダーが、制定のプロセスに参加していなかったことである。その結果、不適切な表現が盛り込まれ、アフリカ人社会の反感や怒りをかきたてた。第二に、法律の制定そのものが、逆に、アフリカ人社会への偏見を増大させたこと。例えば、アフリカ系移民は、すべて「女子割礼」をされているかのように思われ、病院にも行きにくくなり、健康が脅かされるようになったという。著者は、それ以上に問題なのは、こうした法制化が、実際に機能するかどうかが疑わしいことであると結んでいる（Gunning 2002）。

(5)チェイス論文では、アメリカにおけるインターセックス[11]の子どもの性器手術（GS）が議論の対象となっている。この手術がアメリカで行われるようになったのは、一九二〇―三〇年代のことであり、一九五〇年代までには、出産後すぐにどちらかの性に合致するよう手術することが望ましいという方向が打ち出された。しかし、その理由は、もっぱら社会心理学的なもので、身体的には不必要な手術である場合の方が多いと著者はいう。著者自身、インターセックスの子どもとして生まれ、男子と判断されクリトリスを切除されたが、後に女子として再認知され、今度は睾丸を切除されている。これがトラウマとなり、自殺まで考えた著者は、一九九二年にサンフランシスコでインターセックスの人々と知り合い、インターセックス運動にかかわってゆくことになった。運動の目的の一つに掲げられたのが、インターセックスの子

どもへの不要な性器切除の禁止であり、「反FGS法」の適用であった。しかし、この要求は斥けられる。アフリカ系移民が行う「女子割礼」とインターセックス児への手術の類似性を否定する言説を調べた著者は、そこに、アフリカ＝野蛮、アメリカ＝文明という差別の構図を看破する（Chase 2002）。

以上、一連の論文は、アフリカ系移民を対象とした「反FGS法」の制定プロセスにおける「女子割礼」言説への批判や、「女子割礼」とインターセックスの子どもへの性器手術との類似性という問題提起によって、一方で文化相対主義と人権至上主義、他方で第一世界と第三世界という両極分解した議論を乗り越える試みが、アメリカにおいて進行していることを明らかにしている。

日本における議論

日本において、「女子割礼」をめぐる言説を問題にし、議論の口火を切ったのは、すでに述べたように、岡真理である。『現代思想』に掲載された論文「〈女子割礼〉という陥穽あるいはフライデイの口」は、「アリス・ウォーカー『喜びの秘密』と物語の欲望」という副題が示すように、ウォーカー批判を軸に議論が展開されている（岡 1996）。アメリカにおける議論と比較しながら、少し詳しく岡の論点を追ってみよう。

岡は、ナワール・エル＝サーダーウィの著作を引用しながら、「私たち先進工業世界の人間が第三世界の女性について知ろうとするとき、知るという営為自体がじつは、すでにさまざまなレベルで差別性を帯びてしまっているという事実に、努めて自覚的であらねばならない」（一二頁）とし、「私たちが今、いちばん必要としているのは、第三世界を犠牲者視するまなざしから私たち自身を解放し、サーダーウィのことばを借りるなら、第三世界との間に、まったく異なった関係をもつことである」（一三頁）とする。このようなサーダーウィの視点を欠いたがために、アフリカ女性との新たな関係を構築することに失敗した例として、岡はウォーカーの小説『喜びの秘密』を槍玉にあげる。岡は、この小説の「女性性器切除の悲惨さのみを強調し、アフリカ社会における父権制の暴力という観点からしかこの習慣を分析していない」一面性が、「読者をきわめて限定的な――そして、おそらくは彼女たちに対する差別的な――結論にしか導かない」（一八頁）と批判し、その対極にジャニス・ボッディらが聞き取った『裸のアマン』を位置づける。両者の決定的な相違点は、岡によれば、ウォーカーにおける「アフリカ女性たちの生のディテイル」の欠如であり、こうしたディテイルを無視して「アフリカ女性

を一方的かつ恣意的に表象することの暴力性」（二一頁）であるという。このようにして岡は一つの結論に到達する。ウォーカーの視点を受容することは、とりもなおさず、「ウォーカーのテキストに内在する差別性を再生産すること」（三〇頁）である、と。これが、日本における反「女子割礼」運動の担い手たちに対する岡の警告の骨子である。

この岡によるアリス・ウォーカー批判の枠組みは、すでに見たように、コペンハーゲン会議でアフリカ人活動家らによって提起された批判であり、アメリカの研究者の批判とそれほど違わない（ただし、アメリカ人研究者の中には、ウォーカーらアフリカ系アメリカ人が抱くジレンマ――批判はしたくないが、傍観者でもいられない――を理解しようとしている者もいる。〔Lewis 1995: 36-39〕参照）。しかし、その後の展開には違いが見られる。つまり、岡が、サイードの「オリエンタリズム」に依拠しながら、「ポストコロニアリズム」と「第三世界フェミニズム」の視点から、「同じ女」として語ること（＝自文化中心主義）への批判へと論点を拡大したのに対し（岡 1998, 2000a）、アメリカの研究者は、アフリカ系移民や難民認定裁判、あるいは「反FGS法」というアメリカ社会内の現実と向き合う中で、自文化を相対化する方向に向かった。その動きは、現在、「婦人科学」の進歩の中で女性特有の疾患がクリトリス切除によって治療されてきたという一八五〇年代以降の歴史の存在や、インターセクシュアルの子どもへの不必要な性器手術を「女子割礼」と同一の問題として考えることによる自文化の相対化へと向かいつつある。

岡と同時期に「女子割礼」（女性の性器変工）についての論考を発表した（出版は一九九九年）小川了は、フランス滞在中に接した新聞報道の論調への違和感を、花崎皋平の「西欧文化と西欧社会を是とし、他の文化と社会を非としておわるのではない視野を持つ必要がある」との主張に重ねながら、当該社会の内的変化に期待するという第三の「必然論」の立場をとる（小川 1999）。「オリエンタリズム」でも「ポストコロニアリズム」でも「第三世界フェミニズム論」でもなく、いくら「悪」でも「暴力」でも、他者を非難する時の居心地の悪さから発した小川自身の感性的直感論というべきスタンスといえよう。

一方、自分のフィールドであるエジプトに即して「女子割礼」を考察し続けている大塚和夫は、反自文化中心主義・ディテイル解読の必要性・西欧フェミニズム批判という点において岡とスタンスを同じくしながらも、いかなる暴力や悪が存在しようと国境を越えた介入には与し難いとする点で、岡と立場を異にしている[2]（大塚

1998, 1999)。

以上、日本における主な言説論議を紹介したが、いずれも、依って立つ論拠は微妙に異なるものの、声高に廃絶を推進する第一世界のフェミニズム批判という点では、同じ視点を共有している。中でも、岡の影響力は大きく、その論調は、様々な形で引用されてきた[13]。

一方、岡の論調に与しない研究者の多くは、こうした議論を無視するか、あるいは沈黙してきた。そうした中、千田有紀が沈黙を破り、「フェミニズムと植民地主義」を考える手がかりとして、岡の「女性性器切除批判」を取り上げた（千田 2002）。

岡のアリス・ウォーカー批判に対する反駁からはじまる千田の議論は、次の五点に要約することができる。

(1)岡の恣意的なテキストの読み方――「第三世界フェミニズム」を打ちたてようとするために、岡は意図的にウォーカーの「第一世界フェミニズム」を「普遍的人権主義」と読み替えた。しかし、自分を「フェミニスト」ではなく「ウーマニスト」と呼ぶことが示しているように、ウォーカーは決して単純な「普遍的人権」を主張してはいない。

(2)岡の恣意的なテキストの引用――岡は、自分の主張に合わない部分は省いて引用し、ウォーカーの発話の意図を曲解している。例えば、岡は、ウォーカーが文化をア・プリオリなものとして語っており、それこそが彼女の特権的な立場を示しているとする。しかし、それは、ウォーカーが「女子割礼」（FGM）を強姦や奴隷制と同じであると語っているくだりを省略した結果であり、むしろ、ウォーカーは、奴隷制などと比較することにより、従来の文化概念を打ち破ろうとしているのだ。

(3)岡の「第三世界フェミニズム」という枠組み――岡は、「普遍的フェミニズム」の可能性を「第三世界フェミニズム」に求めるが、なぜ、「第三世界」の女性だけが自文化中心主義を乗り越えて「普遍的フェミニズム」の主体でありうると考えるのかが疑問である[14]。むしろ、「第三世界フェミニズム」論という枠組みが、問題を単純化、図式化、固定化してしまっている。

(4)岡のフェミニズムの捉え方へのバイアス――岡は経済力があったなら、性器手術を避け得る選択ができたかもしれない、と主張するが、フェミニズムは経済に還元される問題ではないことを明らかにしたのが、第二波フェミニズムではなかったか。

(5)岡の「欲望」という解釈枠組み――第一世界のフェミニストとは植民地主義的な「欲望」の主体に他ならないという岡の切り口は、「欲望」を発見されてし

まう人に反論の余地を与えない仕掛けとなっている。はたして、岡の言う「欲望」は本当に自明なものとして存在しているのだろうか。

千田は、「当事者」とは誰か、という最後の設問の中で、次のように結んでいる。岡は、民族的主体だけが「当事者」であることを疑わないが、「当事者」とはそれぞれの位置とコンテクストによってはいかようにも揺らぐものである。その「当事者」の声を、植民地的実践に加担しないかたちで、どう聞き取っていけばいいのか、女性性器切除反対の抑圧的ではない具体的な実践を、いかに積み重ねていくのか。それこそが、フェミニストと植民地主義の問題を適切に考えていくために必要な前提である、と。

以上、岡の論点に対する千田の批判を見てきた。千田の批判は、岡のウォーカー批判への批判と、岡自身のフェミニズム論への批判の両方が絡んでいて、整理は容易ではない。その背景には、われわれのウォーカー理解の浅さも関係していると思われる。例えば、楠瀬佳子が論じているように、まずウォーカーのアフリカ観を、彼女の経歴や初期の作品からていねいに読み解くという基礎的作業が必要なのではないか。[15] そうすることによって、岡と千田のウォーカー論に歩み寄りがなされれば、両者の「植民地主義とフェミニズム」の議論は、さらに深められるに違いない。

四　おわりに

まず、以上の研究動向のサーヴェイを通して見えてきた論点を、いくつか指摘してみたい。

(1)「女子割礼」の研究は、廃絶運動の流れと不即不離の関係の中で展開してきたこと。

廃絶運動との関連で具体的な研究の展開を振りかえって見ると、「女性の健康への悪影響」を廃止の理由に掲げていた時期には、健康や医学的な研究が推進され、それが「女性の人権」に移行すると人権関連の研究が増え、さらに廃絶運動が各国に「法制化」を促すようになった現在は、人権のテーマに代わって法律論が増加している。

(2)廃絶運動をめぐる論議と批判に触発され、「文化相対主義」と「フェミニズム」に対する疑義が提起され、問題視されたこと。

この論議は、普遍的人権論と文化相対主義、第一世界フェミニズムと第三世界フェミニズムといった対立の構図を作りだす一方、それらの言説をめぐる新たな議論を誘発し、研究者が自己のポジションや自文化を相対化す

る契機を提供しつつある。そうした中で、アフリカの現場においても、国際社会においても、廃絶への取り組みは着実に拡大し、加速している。しかし、一方、新たに「女子割礼」を取り入れるアフリカの社会もあることは、問題解決が一筋縄ではゆかぬことを示している。

(3)欧米の研究と日本の研究との相違。

欧米やアフリカの研究者がきわめて実践的な具体性を持つ議論へと移行しつつある一方、日本ではいまだに抽象的な「言説」の議論や「第一世界フェミニズム」批判の呪縛を乗り越える地平を見つけられないでいる。この違いの背景には、性器切除という現実の歴史があり、アフリカ系移民を大勢抱えている欧米社会と日本社会との違いがある。しかし、少し視点を移せば、インターセックス児の性器手術やファウジーヤ・カシンジャの難民認定の問題は、日本でも議論さるべき問題である。最近、日本でも、人類学や公法、あるいは開発教育の領域で、オリジナリティのある「女子割礼」研究が出始めたことは、こうした点からも注目に価する。

(4)アフリカ人研究者の登場。

ナイジェリアやスーダンでは、早くから医者が研究者として活躍していたが、九〇年代になって、社会学や医療人類学の領域でもアフリカ人の女性研究者が登場している。彼女たちは、ほとんどが実践活動家でもあり、国際機関やNGO、あるいは西欧や日本の研究者や活動家と連携することによって、異なる文化や社会を超えた対話や協力体制を推進する主体となっている。

(5)研究領域の偏り。

「女子割礼」に関する研究領域やテーマが多様化する中で、最も遅れているのが歴史研究である。そもそも女性史の資料は少ないが、「女子割礼」に関する歴史資料はとりわけ少ない。これまでの歴史研究は、植民地期のケニアに集中してきたが、最近は、スーダンや中東の事例が報告されており、今後の展開が期待される。

最後に、「女子割礼」問題と研究のパースペクティヴについて一言触れておきたい。それは、「女子割礼」が投げかけている問題の広がりと根源的な深さに関係している。一九九〇年以降、「女子割礼」の研究は、学際的様相を呈し、きわめて多くの専門的学問領域で議論がなされてきた。文化人類学、医療人類学、象徴人類学、社会学、教育学、歴史学、心理学、女性学、文学、宗教学、政治学、人口学、疫学、医学、保健衛生、公法、国内法……数え上げれば際限がない。このことは、「女子割礼」問題が、学問的専門領域に新たな局面を切り拓いてきたことを意味する。振り返れば、かつては奴隷制の問題が、最近ではアパルトヘイトの問題が既成の学問に大きな衝

撃を与え、学問全体の再構築を促した事例がある。研究動向のサーヴェイを終えた今、同じことが、「女子割礼」の研究を通して進行しつつある、という思いを強くしている。それを促進するために必要なことは、人の生き様や社会構造を根本的に見直せるような地域研究のパースペクティヴを追求することであり、それこそが、研究者に求められている「実践」なのではないだろうか。

註

(1) このため、男子の「割礼」を意味するCircumcisionの用語は不適切だとして、廃絶運動に積極的な活動家はFemale Genital Mutilation（FGM）を、中立的な立場を取る研究者はFemale Genital Cutting（FGC），Female Genital Surgery（FGS），Female Genital Operation（FGO）などの用語を選択的に使用している（James *et al.* 2002: 19-20; Lewis 1995: 4-8）。本稿では、多様な形態をすべて包括する用語である「女子割礼」を使用するが、必要に応じて、著者が使用している用語を併記する。なお、「女子割礼」は主にエジプトや北東アフリカ、中部アフリカ、西アフリカに居住する様々な民族集団により毎年約一三二―二〇〇万人の女性に対して行われているとされるが、難民や移民の増加により欧米各地にも広まっている。「女子割礼」を行う理由、社会的意味、施術時の年齢は、施術の形態と同様に多様である。詳しくは、（Hosken 1993; Dorkenoo 1994; Shell-Duncan *et al.* 2000; Gruenbaum 2001）などを参照。

(2) 国連の女性の地位に関する委員会が初めて「女子割礼」を公の場で議論したのが一九五二年。一九五八年と一九六一年にはWHOに対して、少女に対する儀礼的な手術を止めさせるようにとの提言が国連の経済社会委員会によってなされたが、WHOは文化の問題であるとしてこれを取り上げなかった（Dorkenoo 1994: 60-61）。その後、一九六四年、トーゴでの国連の会議で初めて「女子割礼」が女性の健康に有害であり、人間としての尊厳を傷つけるものであるとの決議が行われた（小川 1999: 137）。

(3) 一九七五年に「国連女性の一〇年」が発足してから、各地で女性の人権や健康を守るためのNGO組織（例えば、一九七七年に結成されたAssociation for African Women on Research and Development＝AAWORD、本部セネガル、六四の国と地域で活動）が結成されたり、女性や子供の健康に影響を及ぼす慣習に対する啓発活動が国連の主導で始まっている。例えば、一九七九年にスーダンのハルツームで開催された会議は、スーダンの保健関連の仕事に従事する女性たちが「女子割礼」への廃絶に向けての取り組みを強化するきっかけとなった（Gruenbaum 2001: 176）。

(4) この流れは、一九七九年に調印され、一九八一年に発効した「国連女性差別撤廃条約」（二〇〇二年の時点で締約国一七四か国）や、「ナイロビ世界女性会議」（一九八五年）によっても加速された。しかし、この時期は、健康面への悪影響を近代医療の導入によって緩和するという介入スタンスが主流であり、人権の立場からの介入が広く容認されるのは、一九九〇年代になってからであった（Boyle 2002: 48-54）。それは、従来私的領域の事柄として処理されていたDVや幼児虐待が、人権侵害として公的に議論されるようになったことと連動している。例えば、国連人権委員会は、一九九一年にブルキナ・ファソのワガドゥグで「女子割礼」やその他の伝統的慣習を人権の立場から評価するための会議を開催、一九九三年にはウィーンでの第一回世界人権会議で「女子割礼」をジェンダーにもとづく暴力として認知するに至っている（Dorkenoo 1994: 64-66）。さらに一九九四年にカイロで開催された「国連世界人口・開発会議」での討議を踏まえ、「北京世界女性

会議」（一九九五年）では、その行動綱領に「女性器の切除」の廃絶が、女性に対する暴力を防止し根絶するための戦略目標として採り入れられた。

(5) 国連機関に勤務する夫を持つ女性たちは、その外交的ネットワークを利用して、様々な活動を各地で繰り広げ、その活動は、一九八四年の Inter-African Committee (IAC) on Traditional Practices Affecting the Health of Women and Children（本部アジスアベバ、エチオピア）の結成に結びついた。二〇〇一年の時点で、IACは、アフリカ二六か国に委員会を設置して「女子割礼」、早婚、出産、妊娠、栄養、などの諸問題に取り組んでいる（Dorkenoo 1994: 73)。なお、九〇年代半ば以降、各国政府による廃止に向けての取り組みが様々な形で進行している。

(6) 文化人類学が市民権を得る一九世紀末までの記述は、探検家や旅行者によるものであり、古くは一七世紀のエジプトにまで遡ることができる（Meinardus 1970: 329-332)。

(7) エル＝サーダーウィの視点については、（戸田 1996, 1999)、岡（1996）参照。

(8) ASA＝African Studies Association は、一九五七年に設立されたNPO組織。アフリカに関心を持つ専門家、三千人以上の会員を擁し、*African Studies Review, ASA News, History in Africa, A Journal of Method* という四つの学術誌を刊行しているアメリカ最大のアフリカ学会。

(9) 編者は、アメリカのメディアや西欧社会の認識の偏りを、(1)アフリカ五四か国と数百の文化を一つの「未開の伝統」に矮小化していること、(2)アフリカ人女性のすべてを性器に関連づけ、彼女たちを拷問される犠牲者としか考えないこと、(3)「女子割礼」をすべて縫合タイプの割礼に一元化していること、の三点に集約している（James *et al.* 2002: 5)。

(10) 一九九六年、連邦議会は、「反FGS」関連のいくつかの法令を制定、施術を犯罪と規定。州レベルでは、一五の州が禁止法を制定している（Rahman *et al.* 2000: 236-237)。

(11) 「半陰陽」のこと。その形態はきわめて多様。アメリカでは、男女の区別がつきにくい子どもは、一〇〇人に一人、深刻な「異常」が認められる子どもは、二千人に一人の割合で生まれており、中規模以上の都市には少なくとも一つ以上の専門部署を持つ病院がある（Chase 2002: 130)。本論文の著者シェリル・チェイスは、「北米インターセックス協会」の代表である。なお、日本の現状については、（小田切ほか 1997）参照。

(12) 岡と大塚の「女子割礼」をめぐる論考の比較検討については、江原由美子が行っている（江原 1998: 353-359)。

(13) 例えば、文化相対主義の再構築を論じた小田論文は、「女子割礼」の議論を全面的に岡に依拠している（小田 1997)。

(14) これは、江原由美子が提起した批判点であり（江原 1998: 365)、千田は、江原のこの指摘を「慧眼である」と評価する。

(15) ウォーカーのアフリカ観については、楠瀬佳子が論文「アリス・ウォーカーとアフリカ」の中で検証している。その中で楠瀬は、ウォーカーが、一夫多妻や「女子割礼」の慣習を通して、人道的なキリスト教宣教活動に潜む偽善性や植民地的権力構造を暴いてゆくプロセスを考察し、彼女が植民地主義とフェミニズムについて深い認識を持っていることを指摘している（楠瀬 1984)。一方、ウォーカーの『喜びの秘密』に対する批判論文も昨年出版されている（Nako 2003)。

参考文献

土井茂則（1986）「ケニア独立運動に関する一考察――キリスト教ミッションとキクユ族の〈女性割礼〉をめぐる対立について」『アフリカ研究』二八号、四八－六九頁。

江原由美子（1998）「ジェンダーの視点から見た近代国民国家と暴力」、江原由美子編『性・暴力・ネーション』（フェミニズムの主張4）勁草書房、二九五－三六六頁。

花崎皋平（1996）『個人／個人を超えるもの』岩波書店。
石田栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男（編）（1987）『文化人類学事典』弘文堂。
楠瀬佳子（1984）「アリス・ウォーカーとアフリカ――「紫の色」のネティの手紙を中心に」『黒人研究』（黒人研究の会）五四号、四六－五三頁。
松園典子（1982）「女子割礼――グシィ族の事例」『民族学研究』四七（三）号、二九七－三〇四頁。
長島美紀（2003）「FC／FGM問題に見る庇護権の変容――アメリカのカシンジャ判決（一九九六年）を手がかりに」『早稲田政治公法研究』七二号、一八九－二一五頁。
縄田浩志（2003）「香がたすける性のいとなみ――施術された性器と向き合うスーダン女性」、松園万亀男編『性の文脈』（くらしの文化人類学4）、雄山閣、一五三－一七一頁。
額田康子（2000）「Le onzieme commandement を読む――一九二〇年代ケニアのプロテスタント宣教師による女子割礼禁止キャンペーンに対するV・ネッケブルックの視点」『女性学研究』（一九九九年度第三回コロキウム、大阪女子大学女性学研究センター論集）八号、五六－七九頁。
小田亮（1997）「文化相対主義を再構築する」『民族学研究』六二（二）号、一八四－二〇四頁。
小田切明雄・橋本秀雄（1997）『インターセクシュアルの叫び――性のボーダレス時代に生きる』かもがわ出版。
小川了（1999）「抑圧の技術――女性の性器変工とその論理」野村雅一・市川雅編『技術としての身体』叢書（身体と文化1）、大修館書店、一二四－一四六頁。
荻原弘子（2000）「女性性器手術（FGS）を「問題」とするのはだれか、なんのためか――一九三〇年代と七〇年代の議論から」『女性学研究』（一九九九年度第三回コロキウム、大阪女子大学女性学研究センター論集）八号、八〇－九二頁。
岡　真理（1995）「女性報道」『現代思想』（サイード特集）三号、一七三－一八五頁。
――（1996）「〈女子割礼〉という陥穽あるいはフライデイの口――アリス・ウォーカー『喜びの秘密』と物語の欲望」『現代思想』五号、八－三五頁。
――（1998「「同じ女」であるとは何を意味するのか――フェミニズムの脱構築に向けて」、江原由美子編『性・暴力・ネーション』（フェミニズムの主張4）勁草書房、二〇七－二五六頁。
――（2000a）『彼女の「正しい」名前とは何か――第三世界フェミニズムの思想』青土社。
――（2000b）「フェミニズムとエスノグラフィーのあいだで――ジャニス・ボッディによる試み」『女性学研究』（一九九九年度第三回コロキウム、大阪女子大学女性学研究センター論集）八号、九三－一一七頁。
大塚和夫（1998）「女子割礼および／または女性性器切除（FGM）――一人類学者の所感」、江原由美子編『性・暴力・ネーション』（フェミニズムの主張4）勁草書房、二五七－二九四頁。
――（1999）「民族学者のまなざし7　反FGM運動と権力関係」『季刊民族学』八八号、一一〇－一一五頁。
千田有紀（2002）「フェミニズムと植民地主義――岡真理による女性性器切除批判を手がかりとして」『大航海』四三号、一二八－一四五頁。
田中雅一（1994）「割礼考――性器への儀礼的暴力」、大渕憲一編『現代のエスプリ』（暴力の行動科学）三二〇号、至文堂、九七－一〇五頁。
――（1998）「女神と共同体の祝福に抗して――現代インドのサティ（寡婦殉死）論争」、田中雅一（編著）『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会、四〇九－四三七頁。
戸田真紀子（1996）「ナワル・エル・サーダウィ――エジプトからの告発」、和田正平編『アフリカ女性の民族誌――伝統と近代のはざ

まで』明石書店、四二四－四四七頁。
――（1999）「アフリカの女性」、木畑洋一他（編）『アフリカ（〈南〉から見た世界03）大月書店、二三六－二六七頁。
内海夏子（2003）『ドキュメント女子割礼』集英社新書。
若杉なおみ（1999a）「FGMのアフリカにおける実態と母子保健に与える影響」『国際保健医療』一三（二）号、六五－七四頁。
――（1999b）「FGM――文化という暴力」『出産前後の環境――からだ・文化・近代医療』（講座人間と環境5）、昭和堂出版、二八二－三〇三頁。
吉岡郁夫（1989）『身体の文化人類学――身体変工と食人』雄山閣出版。
ベルリン性科学研究所編（1960）『未開社会の女たち』清水朝雄訳、刀江書院。
AAWORD (1983) "A Statement on Genitaile Mutilation," in Miranda Davis, ed., *Third World : Second Sex*, London : Zed Press.
Aman (1994) *The Story of a Somali Girl as told to Virginia Lee Barnes and Janice Boddy*, London : Bloomsbury. (『裸のアマン――ソマリ人少女の物語』高野裕美子訳、早川書房、一九九五年)。
Barker-Benfield, Graham J. (1975) "Sexual Surgery in Late Nineteenth-Century America," *International Journal of Health Services* 5 (2) : 279-298.
Boddy, Janice (1989) *Womb and Alien Spirits : Women, Men, and the Zar Cult in Northern Sudan*, Madison : University of Wisconsin Press.
Boulware-Miller, K. (1985) "Female Circumcision : Challenge to the Practice as a Human Right Violation," *Harvard Women's Law Journal* 8 : 155-177.
Boyle, Elizabeth Heger (2002) *Female Genital Cutting : Cultural Conflict in the Global Community*, Baltimore and London : The Johns Hopkins University Press.
Cameron, Joan/Karen Rawlings Anderson (1998) "'Circumcision', culture, and hearth-care provision in Tower Hamlets, London," *Gender and Development* Vol 6 (3) : 48-54.
Chase, Cheryl (2002) "'Cultural Practice' or 'Reconstructive Surgery'? U. S. Genital Cutting, the Intersex Movement, and Medical Double Standards," Stanlie M. James/Claire C. Robertson, eds., *Genital Cutting and Transnational Sisterhood : Disputing U. S. Polemics*, Urbana and Chicago : University of Illinois Press : 126-152.
Dirie, Waris (1998) *Desert Flower*, New York, William Morrow & Co.. (『砂漠の女ディリー』武者圭子訳、草思社、一九九九年)。
Dorkenoo, Efua (1994) *Cutting the Rose*, London : Minority Rights Publications.
El-Dareer, A. (1982) *Women, Why Do You Weep? Circumcision and Its Consequences*, London : Zed Press.
El-Saadawi, Nawal (1980a) "Creative Women in Changing Societies : A Personal Reflection," *Race and Class*, 22 (2) : 159-82.
――（1980b）*The Hidden Face of Eve : Women in the Arab World*, London : Zed Press. (『イヴの隠れた顔――アラブ世界の女たち』村上真弓訳、未来社、一九八八年)。
Gruenbaum, Ellen (2001) *The Female Circumcision Controversy —An Anthropological Perspective*, Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
Gunning, Isabella R. (2002) "Female Genital Surgeries : Eradication Measures at the Western Local Level : A Cautionary Tale," Stanlie M. James/Claire C. Robertson, eds., *Genital Cutting and Transnational Sisterhood : Disputing U. S. Polemics,* Urbana and Chicago : University of Illinois Press :

114-125.

Hays, Rose Oldfield (1975) "Female Genital Mutilation, Fertility Control, Women's Roles, and the Patrilineage in Modern Sudan: A Functional Analysis," *American Ethnologist* 62 (4): 617-633.

Hicks, Esther K. (1993) *Infibulation: Female Mutilation in Islamic Northeastern Africa (Revise Edition 1996)*, New Brunswick (USA) and London (UK): Transaction Publishers.

Hoodfar, Homa (1997) *Between Marriage and the Market: Intimate Politics and Survival in Cairo*, California: University of California Press.

Hosken, Fran P. (1978) "The Epidemiology of Female Genital Mutilation," *Tropical Doctor* 8: 150-56.

—— (1979) *The Hosken Report: Genital and Sexual Mutilation of Females*, (2nd ed.) Lexington, Mass: Women's International Network News. (『女子割礼——因習に呪縛される女性の性と人権』鳥居千代香訳，明石書店，一九九三年)。

—— (1980) *Female Sexual Mutilations: The Facts and Proposals for Action*, Lexington, Mass: Women's International Network News.

Hosokawa, Sawa (2001) "An Exploration of Appropriate Educational Interventions towards the Practice of Female Genital Mutilation," MA in Education and International Development, Institute of Education, University of London.

James, Stanlie M. (2002) "Listening to Other (ed.): Reflections around Female Genital Cutting," Stanlie M. James/Claire C. Robertson, eds., *Genital Cutting and Transnational Sisterhood: Disputing U. S. Polemics*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press: 87-113.

James, Stanlie M./Claire C. Robertson, eds. (2002) *Genital Cutting and Transnational Sisterhood: Disputing U. S. Polemics*, Urbana and Chicago: New York, University of Illinois Press.

Kassinja, Fauziya/Layl Miller Bashir (1997) *Do They hear you when you cry*, New York: Delactte Press. (『ハトからハーヤの叫び』大野昌子訳，ハリー・ドボンハイ，一九九九年)。

Kenyatta, Jomo (1938) *Facing Mt. Kenya: The Tribal Life of the Kikuyu*, London: Secker and Warburg. (『ケニヤ山のふもと』野間寛二郎訳　理論社，一九六二年)。

Kibor, Jacob Zablon (1998) "Persistence of Female Circumcision among the Marakwet of Kenya: A Biblical Response to a Rite of Passage," A Dissertation submitted to the Faculty in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy, Intercultural Studies Concentration at Trinity International University.

Koso-Thomas, Olayinka (1985) *The Circumcision of Women: A Strategy for Eradication*, London: Zed Press.

Leakey, L. S. B. (1931) "The Kikuyu Problem of the Initiation of Girls," *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 61: 277-285.

Lewis, Hope (1995) "Between 'Irua' and 'Female Genital Mutilation': Feminist Human Rights Discourse and the Cultural Divide," *The Harvard Human Rights Journal*, Vol. 8, Cambridge MA: Harvard Law School: 1-55.

Lightfoot-Klein, Hanny (1989) *Prisoners of Ritual: An Odyssey into Female Genital Circumcision in Africa*, New York: Harrington Park Press.

Mandara, Mairo Usman (2000) "Female Genital Cutting in Nigeria: Views of Nigerian Doctors on the Medicalization Debate," in Shell-Duncan/Hernlund, eds., *Female "Circumcision" in Africa*, Boulder and London: Lynne Leinner Pub-

lishers : 95-107.

Mayer, Philip (1953) " Gusii Initiation Ceremonies," *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 83 : 9-36.

McLean, Scilla/Stella Efua Graham, eds. (1985) *Female Circumcision, Excision and Infibulation*, 3rd ed., London : Minority Rights Groups (1st ed. *Minority Rights Group Report* 47. 1882).

Meinardus, Otto F. A. (1970) *Christian Egypt : Faith and Life*, Cairo : The American University in Cairo Press.

Munene, G. Macharia (1996) " Intercultural Conflict : The Fight over Female Circumcision, 1914-1932," *MILA* (*N. S.*) Vol. 1, A Journal of the Institute of African Studies, Nairobi, University of Nairobi : 73-88.

Nawata, Hiroshi (1997) " An Exported item from Badi' on the Western Red Sea Coast in the Eighth Century : Historical and Ethnographical Studies on Operculum as Incense and Perfume," in Katsuyoshi Fukui/Eisei Kurimoto/Masayoshi Shigeta, eds., *Ethiopia in Broader Perspective : Papers of 13th International Conference of Ethiopian Studies*, Vol. I, Kyoto : Shokado Book Sellers : 307-325.

Nako, Nontassa (2003) " Possessing the Voice of the Other : African Women and the 'crisis of Representation' in Alice Walker's *Possessing the Secret of Joy* ," Oyeronke Oyewumi ed., African Women & Feminism : 187-196

Nayra, Atiya (1984) *Khul-Khaal : Five Egyptian Women tell Their Stories*, Cairo : The American University in Cairo Press.

Neckerbrouck, V. (1978) *Le onzieme commandement,* Nouvelle revue de scence missionnaire, Immensee.

Oyewumi, Oyeronke (2003) African Women & Feminism : Reflecting On the Politics of Sisterhood, Tren ton : Africa World Press.

Presley, Cola Ann (1992) *Kikuyu Women, the Mau Mau Rebellion, and Social Change in Kenya*, Boulder and London : Lynne Reinner Publishers (『アフリカの女性史―ケニア独立闘争とキクユ社会』倉本愛子訳、未来社、一九九六年).

Rahman, Anika/Nahid Toubia (2000) *Female Genital Mutilation : A Guide to Laws and Politics Worldwide*, London and New York : Zed Books.

Robertson, Claire C. (2002) " Getting beyond the Ew! Factor : Rethinking U. S. Approaches to African Female Genital Cutting," Stanlie M. James/Claire C. Robertson, eds., *Genital Cutting and Transnational Sisterhood : Disputing U. S. Polemics*, Urbana and Chicago : University of Illinois Press : 54-86.

Rosberg, Carl G. Jr./John Nottingham (1970) *The Myth of " Mau Mau " : Nationalism in Kenya*, first published 1966, New York : Meridian Books.

Sanderson, Lillian Passmore (1986) *Female Genital Mutilation : Excision and Infibulation, A Bibliography*, London : Anti-Slavery Society for the Protection of Human Rights.

Sandgren, David P. (1989) *Christianity and the Kikuyu : Religious Divisions and Social Conflict*, New York/Bern/Frankfurt am Main/Paris : Peter Lang.

Shell-Duncan, Bettina/Ylva Hernlund, eds. 2000 *Female " Circumcision " in Africa : Culture, Controversy, and Change*, Boulder and London : Lynne Reinner Publishers.

Tanaka, Kiyofumi (2000) *Medical Anthropoligical Study in Western Kenya and Its Implications for Community Health Development*, IDCJ Working Paper Series No. 55, International Development Center of Japan.

Thiam, Awa (1986) *Black Sisters, Speak Out : Feminism and Oppression in Black Africa*, London : Pluto. (原本は一九七八年にフランス語で出版)。

Thomas, Lynn M. (1997) "Ngaitana (I will circumcise myself) : The Gender and Generational Politics of 1956 Ban on Clitoridectomy in Meru, Kenya," in Nancy Rose Hunt, Tissie P. Liu and Jean Quataert, eds., *Gendered Colonialisms in African History*, Blackwell Publications : 16-41.

—— (1998) "Imperial Concerns and 'Women's Affairs' : State efforts to Regulate Clitoridectomy and Eradicate Abortion in Meru, Kenya, *Journal of African History*, 39 : 121-145.

—— (2003) Politics of the Womb : Women, Reproduction, and the State in kenya, Berkeley : University of California Press.

Toubia, Nahid (1985) "The Social and Political Implications of Female Circumcision, The Case of Sudan" in Elizabeth Fernea, ed., *Women and the Family in the Middle East*, Austin : University of Texas Press : 148-59.

—— (1998) *Female Genital Mutilation : An Overview*, Geneva : WHO.

Wada, Shohei (1984) "Female Initiation Rites of the Iraqw and the Gorowa," *Senri Ethnological Studies*, 15 : 187-196.

—— (1992) "Changes in the Practice of FGM among the Iraque in Tanzania," *Senri Ethnological Studies*, 31 : 159-172.

Walker, Alice 1982 *The Color Purple*, Pocket Books. (『カラーパープル』柳沢由実子訳、集英社、一九八六年)。

—— (1992) *Possessing the Secret of Joy*, New York : Harcourt Brace Jovanovich. (『喜びの秘密』柳沢由実子訳、集英社、一九九五年)。

Walker, Alice/Pratibha Parmar (1993) *Warrior Marks : Female Genital Mutilation and the Sexual Blinding of Women*, New York : Harcourt Brace (Documentary and Companion Book. 日本語吹き替え版とデオテープ『戦士の刻印』)。

Walley, Christine J. (2002) "Searching for 'Voices' : Feminism, Anthropology, and the Global Debate over Female Genital Operations," in Stanlie M. James/Claire C. Robertson, eds., *Genital Cutting and Transnational Sisterhood : Disputing U. S. Polemics*, Urbana and Chicago : University of Illinois Press : 17-53.

Welbourn, F. B. (1968) "Keyo Initiation," *Journal of Religion in Africa*, Vol. 1 : 212-232.

(とみながちづこ／宮城学院女子大学)